
正義の味方と武器商人

春ノ風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方と武器商人

【Nコード】

N2786P

【作者名】

春ノ風

【あらすじ】

正義の味方と武器商人の本来ならばあり得ない邂逅を春ノ風の主観をもとに描いた二次創作。TYPE-MOONとヨルムンガンドという史上初？のクロス作品です。

ブログ（前書き）

おそらく需要が少ないであろう作品を書いてみました。あまりにも需要が少ない場合は消去しますので。ちなみに、この作品は春ノ風の気分によって書かれるので不定期に更新されますのであしからず。

プロローグ

——世界の急速な近代化に伴い、武器という概念が大きく変わ
りつつある。

——古代、自己と他者とが己の誇りを賭けて殺し合うのに用いら
れた武器。剣にしる槍にしる、それはやはり一対一の決闘に使われた
騎士の象徴とも言える存在。

しかし、発展し続ける現代の武器ではそのような誇りはない。

——銃、爆弾、核。

その他にもたくさんの武器があるがこれらに共通しているのが大量
虐殺を可能にするということ。

「——そんな現代にたった二本の剣で二百人近くいる武装組織
を制圧した」

ホテルの一室でパソコンをカタカタと操作しながら嬉々として話す
制服姿の少女。そんな少女に対峙し、疑惑の眼差しを向ける初老の
男と眼帯の女。

「しかし、ココ。それはあまりにも……………」

眼帯の女はつい言い淀む。確かに女は少女を好きだし尊敬もしてい
る。だが少女の言うそれはあまりにも非現実的過ぎている。

「まったくだ。だいたい潰された武装組織はP国と繋がっていて最
新式の武器もいくらか導入されているんだ。そりゃ、過ぎたおとぎ

話つてもんよ」

男は深々と煙草を吸い、少女の話をあつさり否定する。しかしそれ
も当然だ。如何に剣に優れた者として銃相手では勝ち目はない。一対
一ならば可能性が無いわけではないが二百もの人数を相手にすれば
その可能性は間違いなくゼロだ。

『——— それでは次のニュースです』

テレビを点ければ丁度、この話をテレビでも放送されている。専門
家の分析ではP国と隣国し、なおかつ嫌悪関係であるI国が部隊を
派遣したのではないかと話されている。P国とI国の仲の悪さは周
知の事実でしばしば砲撃戦が行われたり、未遂で終わったが、今回
潰された武装組織の一味と思われる者がI国の外務大臣を暗殺しよ
うとした。以上を踏まえれば、そういう見解になるのは至極当然と
も言えよう。だが———

「今朝、興味深いものを入手してね」

「「……………？」」

少女の急な話題転換に二人は首をかしげる。

「これを見てほしい」

パソコンのディスプレイを向けられ、二人は視線をそちらに変える。
見れば、一つの写真と一つのリストが貼られている。

「この男がそうですか？」

どういふコネで入手したのかはわからないが、武装組織の中につけられた監視カメラの写真の一つであろうものには一人の男が写っている。黒煙がたち込めているのか、よく見えないが、白い髪と紅い服、それに白い面で顔を隠している。そして、手には先ほど少女が言っていた白と黒の剣を持っている。特徴はそれくらいしかわからなかったが、見つけるには十分である。西アジアに位置するP国にこのような目立つ髪ของ男はそういないのだから。

「……………で、こつちのリストはP国の入国リストですか？」

女の言う通り、それは武装組織が潰された二日前の入国リスト。それを女は上から順に読み上げる。男の方はもう興味をなくしたのかソファアーに腰を下ろしコーヒーを飲んでいる。

「……………あれ？珍しいですね」

「ん？どうかしたのか、バルメ？」

「いえ、ただ名前からして日本人らしき名前があるだけなんですけど」

P国は世界的にも内戦やI国との衝突で危険な国だということが知られており、基本的には外国人の入国は禁じられている。

「へえ、そんな所に珍しいな。なんて名前なんだ？」

少しは興味を持ったのか、男はコーヒークップを持ちながら立ち上がり、ディスプレイを覗く。

「ええと、エミヤシロウ……………「エミヤだと!？」——!!どうした

んですか？いきなり大声を出して」

「おい！ココ！こいつはまさか……」

少女はニヤリと口角を上げる。その笑みは見る者を魅了する美しさを持つが、それは決して歳相応の笑みではない。

「その通りだよレーム。私はこの男をあのエミヤの息子ないしは後継者だと睨んでいる」

「……………俄には信じられないな。それでココはどうするつもりだ？」

男は一息ついて再びソファーに腰を下ろす。

「ふふ、わかってるくせに何故聞く？」

すでに予想していたのだろう、少女は先ほどと同じ笑みを浮かべながら男の質問の上に質問を被せてきた。

「ああ、わかった。わかったよ、たく……」

その質問の意味を理解したのか、男は小言を言いながらマガジンを積めていく。そして、完全に置いてきぼりをくらっている女に少女は顔を向ける。

「ふふ、喜んでバルメ。新しく仲間が増えるかも知れないよ」

女に向けた少女の表情は先ほどの笑みとは違い、歳相応な可愛らしい笑顔であった。それを見た女は一瞬理性が吹き飛んだが、少女に

抱きつく一歩手前でなんとか自制した。

「（一切の情報が不明のあのエミヤキリツグに子息がいたなんてな……）」

「（フフ、エミヤシロウか………）」

「（ああ、ココ。可愛すぎです）」

エミヤという名にそれぞれの思惑が飛び交う。——そして、遂に正義の味方は武器商人の少女と邂逅する。

プロローグ2（前書き）

けっこう早くできちゃった。でも、今回はちょっと人によっては好き嫌いがあるかもしれない。

プロローグ2

——俺たちは今、I国のあるホテルの前に立っている。それはお世辞にも綺麗だとか趣があると言えない。まあ、一言で言えば汚いホテルだ。しかし、そんなことは気にしていないのかうちのボスはそのホテルの中に入っていく。

「……………へえ、中は案外綺麗なんだ」

やはりココもこのホテルの汚い外見を気にしていたのか、小さくつぶやいた。確かに、ココの言う通りあの汚い外見とは対称的なまでに綺麗に整えられている。埃ひとつないのは清掃がきちんと行き届いている証拠だ。しかし、なんでこんなに外とのギャップが激しいんだ？

「ん？」

ピカピカにみがかれた床や窓に向けていた視線を前方に向ける。すると、そこにはこのホテルのマネージャーらしき人物が対面している。私服姿の清掃員にペコペコと笑顔で頭を下げている。挙げ句の果てには握手までしている。一体どういう状況だ？さすがのココでもクエスチョンマークが頭の上に浮かんでいるようだ。

「ん？……失礼します。いらっしやいませ」

マネージャーがこちらに気づき清掃員と別れてこちらにやってきた。

「なんでマネージャーが清掃員にペコペコ頭を下げているんですか」

「え？ああ、あの方は清掃員じゃなくて宿泊客なんですよ」

「え！？」

マネージャーによつて告げられた衝撃の事実にはココとバルメは開いた口が閉まらないようだ。

「ここじゃお客に掃除をさせるのか？」

そう言つとマネージャーは慌てて両手を振つた。

「いえいえ、あの方は自主的にやってくださつたんですよ。先日、このホテルに來た強盗をあの方が捕まえてくれたので、そのお礼に無料にさせてもらつたらそれじゃあ悪いって言われて掃除をし始めたんです」

「……」

今度は俺も言葉を失つた。マネージャーの話を簡単に整理したら恩返しの上に更に恩を被せてきたのだ。

「……そんな変な人もいるんだ」

ココが代表して俺たちの心の声を口にしてくれた。気のせいかも知れないが誰かのくしゃみの声が聞こえた。

+ + +

「うう、風邪でもひいたか？」

自室に戻る最中、昨日までは何ともなかったのにいきなり何の前触れもなくくしゃみが出た。まあ、そんなの気にしないが……………。

「遅いです!」

「ウオツ!?!」

扉を開けた瞬間、一本の剣が頭目掛けて飛んで来た。それを何とかしゃがんでやり過ごす。

「何するんですか!?!」

通り過ぎた剣を見送って、それを投げたであろう女性に振り返り抗議する。

「遅いと言っているのです。もうここが奴らにバレるのは時間の問題。そうになったら、マネージャーや他の宿泊客に犠牲が出る」

「う……………」

確かに、俺たちには時間がない。この前殺し損ねた死徒が俺たちに対して復讐の眼をいだいていた。おそらく、仲間を増やして襲撃を仕掛けてくるかもしれない。そうすれば他の人に危険が及ぶ。女性の言うことは正論中の正論である故に反論など出来ないしする必要もない。

「すみません、シエルさん」

だから対面する女性、シエルさんに心から深く謝る。

「い、いえ。別にそこまで怒っていないので。……………それにそういう士郎君の性格も好ましいですから」

最後の方がゴニョゴニョと小さくなつてあまり聞こえなかった。

「ええと、最後の方がよく聞こえなかったんですけど……………」

「何でもありません！」

頬を赤らめながら言うシエルさん。一体どうしたのだろうか？

「私は食料を買って来ます。ほとんどきれそうだったので」

「それなら俺が——」

——買いに行きます。と言おうとしたら先に手を前に出して制止された。

「今士郎君は働いて来たでしょ？なら、今は休んでください。それにここを出る準備もしといてください。私が帰って来たらすぐに出ますよ？」

「でも…………い・い・で・す・ね？」……………はい」

素敵な笑顔で釘を打たれた。こういう時は何を言っても勝てない。だから、諦めるしかない。

「わかったならよろしい。では行ってきます」

「行つてらっしゃい」

そういうやり取りをした後、シャワーを浴びて荷物を積み始める。
すると――

――コンコン

ドアを叩く音が二度響き渡る。

「あれ？シエルさん……………にしては早いな」

先ほどのシエルさんとの会話を思い出す。投擲用のナイフを投影する。黒鍵でもいいのだが、この前漬した武装組織の残党だったらいけないしな。あの時はシエルさんが周到に結界を張ってくれたし、事後処理もしてくれた。けど、今は何もしていないから宝具はおるか黒鍵の投影なんかもできない。

コンコン、と時間を置いて再びノックする音が聞こえる。

「……………どうぞ、空いてますよ」

神経を尖らせ、警戒しながら外にいる者に告げる。そして、ドアノブが回り、ドアが開かれる。

+ + +

「ここか」

ココについて来てやって来たのは四階の一番端の407と書かれた一室。ココが入手した情報によればここにエミヤキリツグの息子、

エミヤシロウがいるらしい。

コンコン、と俺が考えているとココがドアを叩いていた。

「あれ、いないのかな？」

返事が返って来ないので、もう一度ココがノックしようとする――

「ちょっと待ってください、ココ」

「ちょっと待て、ココ」

俺とバルメの制止の声が重なる。

「どうしたの、二人とも？」

俺たちの制止にココは一旦ノックするのを止めてこちらに顔を向ける。

「嫌な予感がします」

「ああ、それにこの跡も気になるしな」

言いながら後ろを振り向く。黒い壁だったからココは気づかなかつたかも知れないが、俺たちのボスならばこういう小さな事にも注意してほしい。といっても俺も一度目のノックの時に気づいたんだけどな。

「何これ？刃物の刺し跡？」

「ええ、しかもかなり新しいですね」

「んで、誰がこの傷をつけたかって言うと……」

三人一斉に再び407号室のドアを見る。この傷をつけたのは十中八九今407号室に宿泊している客だろう。

「ま、要するに入るなら用心してから入れってこつたな」

ココの背中を軽く叩いてノックを促す。すると、「どうぞ」という返事が返って来たのでここはゆっくりと開ける。

—— さあ、エミヤシロウ。お前は蛇か、それとも鬼か？

まだ見ぬエミヤキリツグの息子に対して笑みを禁じ得なかった。

プロローグ2（後書き）

書いていて気づきました。ココの少女時代の仲間には誰がいて、誰がいないのか。そして、仲間になった順番も。これってけっこう重要じゃないですか？誰か知ってる人教えてください。

ブログ3（前書き）

二ヶ月も待たせてしまつてすみません。今は海外にいるし、最近無駄にアホリズムやP i a キャロットとF a t e のクロスを書いて時間がないって言うのが言い訳です。また、近い内に別作品も書けたらと思っているのですが、そちらは完全オリジナルなので、投稿はまだ難しいです。まあ、気楽にやるのでどうか読者の方々も気軽に春ノ風にお付き合いください。

プロローグ3

ココがドアをゆっくり開け入っていく。私たちはそれに続いて入っていく。

中にはナイフを持った長身の男性。というか……………

「さっきの掃除してた変な人！」

ココの言う通り、先ほどマネージャーと話していた人物。それとココ、一応初対面なのですからそういうことはあまり言わない方がいいと思います。

「初対面で変な人とはひどい言いぐさだな。一体君たちは何用だ？ 部屋を間違えているんじゃないか？」

そう言いながら壁にもたれかけ肘を組む。その男の雰囲気はまるで別格。数え切れないほどの戦場を渡り歩いたのだろう。並の兵士とは段違いだ。裏の世界に精通しているとはいえ、ただそこにいるだけでこれほどまでの雰囲気をかもちだす人間は見たことない。

「ああ、すまない。少し以外過ぎてね。気にしないでほしい。エミヤキリツグの息子。エミヤシロウ」

そうココが言っただけで部屋の気温が下がるくらい冷やかな殺気を感じた。その殺気を放っている男は表情は全く変えず、私たちの一作一動に気を払いながら睨みをきかす。

「……………君たちは一体何者だ？ 私の本名だけでなくキリツグの名

まで知ってる者はそういないが」

だが、ココはそんなことには動じることはなく、自然な様子で椅子に腰掛け、そのまま話を続ける。

「君はH C L Iという会社をご存知かな？」

エミヤという男はココの問いかけを聞いてようやく私たちの正体に気がついたようだ。

「武器商人か。それも君のような少女に手練れの傭兵を二人もつけるとなると……………フロマイト氏の実子、ココ・ヘクマティアルぐらいかな？」

「ご名答。大した推理力……………と言いたいところだが、ならば私たちがここに來た理由がわかるか？」

「ふむ、観光かね？」

「フフ、観光か。そうだな、今度機会があればしてみよう」

「ククク」

「フフフ」

二人の間で何かが通じあったのか同時に笑い出す。二人のそれは一見不気味ではあるがココなら十分魅力的です。

「予想以上だ、エミヤシロウ。気に入った」

「ああ、贅辞はありがたく頂戴しよう。だが、先ほども言ったが武器商人である君がここに何の用だ？」

「単刀直入に言おう。私たちの仲間にならないか？」

今までとは違う、まるで鷹の目のような鋭い眼差しが私たちを貫くように見詰める。

「……………なぜ、私を誘う？君のような武器商人ならばもっと経歴のよい軍人や傭兵を雇うほうが有益ではないのかね？」

「そうだな、強いて挙げるなら女の勘ってやつかな。それでは理由にならない？」

「ク、酔狂な子だ。ああ、それともう一つ聞くべきことがあるのが正直に答えてくれ」

「何？」

「君たちは——敵か味方か？」

「は？」

ココとエミヤが話しているのについ口を開いてしまった。しかし、それはしょうがないはずだ。今まで色々な商談をしてきたが、いきなり百八十度も話を変えられたのは初めてだったのだから。

「まあ、君には何の恨みもないから敵ではない。かといって君の返事次第では味方にもならないからな。難しい質問だ」

「……………だそうです。だから黒鍵をしまってください」

エミヤシロウという男の視線がココから私たち、いや、私たちのさらに後ろへ向く。

「「な!?!」」

私もレームも動けなかった。動けば首元に据えられた刃物によって首をはねられていたからではない。今まで感じたことのない恐怖すら感じる気配を一メートルにも満たない距離からいきなり感じたからだ。

+ + +

『行つてきます』、『行つてらっしゃい』か。ああ、なんという響きなのでしょう。ただ買い物に行くだけが何とも素敵に思える。まるで、夫婦……………いえ、これ以上は考えてはいけない。ただでさえ自分でもわかるくらい顔が赤くなっているのにそれ以上妄想を続けたら爆発してしまう。

「ん?」

私たちの部屋から土郎君の他に三人の気配がする。今までの思考を抹消し、スイッチを切り替える。土郎君の知り合いかも知れないが一応警戒して気配を消し、変な行動をとらないように黒鍵を取り出す。

「……………だそうです。だから黒鍵をしまってください」

土郎君が子どものいたずらを咎めるように私に言ってきた。むう…

…、それじゃあ私が悪いみたいじゃないですか。

とりあえず三人の目が完全にこちらに向かないうちに黒鍵をしまう。

「それで誰ですかこの人たちは？私の留守中に女性二人＋１も部屋に連れ込んで」

「俺は＋１かよ」

男が何か言ってるが聞こえない。

「いや、勘違いしてますよ」

「いいんです。どうせ私たちはカレーを作る人と食べる人という関係ではないですもんね！」

「いやいや、違いますから。そこからまず勘違いしてますよ」

「冗談ですよ土郎君。本気にしないでください」

「え？」

『え？』ってなんですか。『え？』って。まさか、本当に私がそんなことを考えているとも思っただんでしょうか。これを機に私のことをどう思っているか深く追及したいところですが一応抑えて現状を把握するのに専念しましょう。

「……………」

この部屋には私と土郎君の他に二人の女と一人の男。うち一人は明

らかに戦いを経験したことのない少女。その少女の前に立つのはおそらく戦場を何度か経験したことのある男女。そして、三人に共通して言えるのは魔力を感じないこと。結論から言えば彼らは私たちとは関係ないただの一般人ということだ。

「「「「……………」」」」

三人の視線が一気に私に集まる。だが、そんなことは気にせず状況整理に専念する。

「……………なるほど」

静寂に満ちたこの空間では自分のつぶやいた声が意外と大きく聞こえる。

「——この前の残党ですね？」

「だから違っつて!!」

面白いくらいに的中した私の予想についてほくそ笑んでしまう。そして、私の冗談に対する士郎君のつつこみは虚しいほどに響き渡った。

+ + +

「なるほど、大体把握しました」

「というより最初からわかっていたでしょ？」

エミヤはカソック姿からして修道女だろう女性に状況の説明を終え、今では談笑している。

「……. だけど、なんだろう。私たちが忘れ去られているような気がする。」

「さてと……. 仕事を再開しましょうか？」

「ああ、そうですね。俺が掃除なんかしてたばかりに…….」

「いえ、士郎君の責任ではありませんよ。私も許可しましたし、予定外なこともありましたがからね」

「おそらくというか、絶対に予定外というのは私たちを差しているのだろう。」

「けどかなり隠密性に長けた奴が仲間にいたんですね」

「ええ、まさかこんな近くまで接近されて気づかないなんて一生の不覚です」

「「「…….?」」」

二人はなんの話をしているのだろうか、私たちは顔を見合わせる。

「その貴女」

まだ自己紹介もしていないので名前はわからないが、何故か修道女に指を差される。

「ん？私？」

「――それは敵意も殺気もない、まるで今から自己紹介でもするかのような柔らかい表情で――」

「はい、貴女です。――動かないでくださいね」

「は？――！？」

「――直後、それは放たれた。」

そして、放たれたであろうそれを確認するために後ろを振り向こうとする。

あえて付け加えておくが、別に投擲された何かを視認出来たわけではない。私自身がない武器商人なのでバルメ達のような超人的なものは持っていない。

なのでただ低いうめき声がした方向、すなわち後方に目を向けようとするが……

「見るな――！」

エミヤが叫び、寸でのところで立ちとどまる。普通ならばこの様な言葉に強制力など一切ないはずだ。だが何故か先ほどまで感じなかったのに、いきなり与えられた脳からの禁止令に体は頷くことしか出来なかった。それは二人も同じらしく、結果誰も後ろを振り向いていない。

そんな中、別のうめき声が二つ新たに聞こえたが、禁止令は未だに続いている。

「三つですか．．．．．、逃げたか、それとも．．．．．」

「気配を完全に消してないところから見ておそらく誘っていますね」

「でしょうね。一介の死徒風情がやってくれますね。先に行きます」

何かを投擲した修道女は四階であるにも関わらず、躊躇なく窓から飛び降りた。その行動に驚いたが、エミヤがそれを止めようともせず、ただ「はい」とだけ答えたのにも驚いた。

「さて、巻き込んだ形になってすまないが君たちには二つ選択肢がある。今日起こったこと全てを忘れてこの場で眠る、又は後ろを振り向いて君たちの非現実と向き合うかどちらかだ。こちらとしては前者がおすすめだ」

「質問があ「却下だ」．．．．．ッ!? 何故だ!？」

「時間がない。今すぐ決めたまえ。もし迷っているというのなら君たちの意識を刈り取って今日の出来事を無かったことにしてやる」

エミヤはどこから取り出したのかわからないが、白と黒の双剣を携えてそう宣言した。それを見てレームとバルメも私の前に出るが二人ではきつと勝てない。それは直感であって明確な理由などないが二人もそれを感じとっているのだらう、私が見てもわかるくらいに汗をかいている。

「．．．．．」

その双眸はまるで人を殺すのに躊躇いなどはないと言っているかの

ように冷めた眼をしている。

「……………化物めッ！」

「……………チッ！」

レームとバルメは二人揃って悪態をつく。今二人の頭の中ではいくつかの戦闘シュミレーションが成されているのだろう。だが、それを行動に移していないという事はその全てが二人の敗北に終わっているということだ。

そもそも、エミヤがいつまでもこの街に滞在する保証など無かったためとは言え、二百の武装集団を壊滅させた男に対しここまで準備を怠った自分のミスに嫌気が差す。

「チッ!？」

そんなことを考えていると、エミヤはいきなり私たちとは真逆である後方に振り返り、その振り向き様に双剣を振るう。

「ギィアッ！」

そこにはたった今まで人型だった二つの肉塊が転がる。

「クク、記録したぞ。離れれば殺す」

横に切断されたにも関わらず、その肉塊は両腕で上半身を支え意味のわからない言葉を告げた。この時、間違いなくこの生物は人間の皮を被った何かだと悟った。

そして人型の何かの言葉を聞き終えたエミヤは半身だけのそれにも答えず無慈悲にとどめを差し、再びこちらに振り向いた。

「すまないが、今言った選択肢はなくなつた。代わりに最悪の選択肢が出来てしまったがね」

たつた今、人型を殺したというのにエミヤは何も無かつたかのように話を再開する。

「・・・・・・・・それでその選択肢は？」

出来るだけ殺された人型を視界の外側に追い込み、数ある疑問の中から一つをピックアップしてエミヤに尋ねた。

「君たちが私と行動をとみにするだけだ」

これが魔術という私たちとはまた別の裏に関わつた初めての事件である。

ブログ 4（前書き）

更新遅くなってすみません。まだ、がんばって続けますので応援よろしく願います。

プロローグ 4

先ほどまでいた町を抜け郊外の森に入る車が一台。その中には人影が四つ。その内三つは残りの一つに対して明らかに警戒心を抱いている。だが、もう一つの人影はそれ以上に運転しながらというの外、中ともに何が起きても対応出来るように警戒している。

「さて、そろそろ質問に答えてくれないか？」

先ほどから口を閉じたままのココの代わりにレームが士郎に尋ねる。

「ふむ、答えられないこともあるが先ずは何から聞きたい？」

「君に殺されたあの化物はなんだ？」

その質問は至極当然なものであった。故に、最初から用意していたのである。つ、士郎は考える素振りも見せずに即答した。

「あれは死徒といって人を止めた、又は止めざるを得なかった化物。まあ、君らでいう吸血鬼だ」

普段ならば吸血鬼と言われてもそれは空想上の化物、映画や小説にしか登場しないキャラクターだと笑い飛ばすが、実際にこの目で見ってしまった以上信じるしかあるまい。半ば無理矢理ではあるがそのような存在がいるのだと三人は納得した。

「人を止めた、と言ったな？ ならばあいつらは皆元々は人間だったのか？」

この中で最も人生経験の豊富なレームが二人よりも先に正気に戻り、新たな質問をした。

「死徒は大半が人間から吸血鬼になったものだが、中には元から吸血鬼だったやつらもいる。さっきのは皆死徒化した人間だ」

ゴクリと唾を鳴らす音が聞こえた。誰かはわからないが士郎以外の三人の内の誰かであるのは間違いない。そして、当人以外の二人が心配そうに目を向ける。

「恐ろしいか、ココ・ヘクマティアル？」

バックミラー越しに目を合わせ少女に問う。問われた少女はホテルにいた時とは打って代わって萎縮し、僅かに体を震わせながら質問に答えない。否、それこそが答えでもある。

だがそれは無理もない話である。数多の戦場を駆け回ったレームとバルメでさえ今回の件は吐き気がした。気持ち悪いというレベルではなく恐怖でだ。二人でそれほどの衝撃を受けたのだ。ココがそれ以上の衝撃を受けるのは必然であろう。下手をすればトラウマになりかねない。

「君にこれをやろう」

それをみかねた士郎は三人に気づかれないように投影した白い短剣を手渡す。

「綺麗……」

車に乗ってようやくココが口を開けた。開口一番が怖いでもなく恐

ろしいでもない。単純な短剣に対する感想。武器商人である彼女は銃ほどではないが刀剣類も目にすることは何度かある。だが、心を奪われるというようなことはこれまで一度もなかった。

「それは“エオロー”（戦乙女の聖なる加護）と言ってな。魔除けの加護があり、君に害を為す者が現れればそれが強く光る。それとレームと言ったか？」

「ん？そつだが何だ？」

「少し運転を変わってくれないか？」

+ ? + ? +

道なき道をヘッドライトを頼りに突き進む車が一台。その中には人影が三つ。．．．．．三つになってしまった。

「おい、エミヤ。大丈夫か？」

レームは車内にはいないはずの人物に声をかける。

「問題ない」

その問いかけにぶつきらばうに士郎は答える。その声は車内ではなく車の上から聞こえ、その声を聞いてレームは小さく「化け物だな」と愚痴る。

現在車は六十キロで走行中。それに加え、道路整備は行き届いとどいていないためガタガタと揺れている。そんな中、士郎は車の上に直立している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

——突然、士郎にもらった短剣が光り出す。それにはココだけでなくバルメも驚き、レームもバックミラー越しにその光を目にした。

「・・・・・・・・あ、消えた」

だが、その光もわずか三秒程しか発光せず、すぐにもとの白い短剣の色に戻った。

今の現象は一体何だったのかわからないココは士郎に聞こうと思いい窓から顔を出す。

「エ・・・・・・・・ん？」

何かの水滴がココの頬に落ちてきた。雨は降っていないし、最近雨が降った形跡もない。考えてもわからないので頬を撫でみるとそれは見たことのある赤い液体だった。

そして、それが何か理解し、今自分たちに何が起きているのか悟ったと同時に士郎が二度強く屋根を踏む。

——それは合図。何かあった時のために士郎が考えたものだ。

その後の行動は早かった。レームが車を急停止し、ココとバルメが前方及び上方に銃を向ける。

——ヘッドライトの先から小さな音を立てながら近づいて来る

足音が聞こえる。

レームもいつでも車を発進出来るようにしながら、近づく相手を見極める。だが、以外にも現れたのは――

「――エミヤ!？」

現れたのは先程まで車の屋根に乗っていたはずの士郎だった。

ココが屋根の上を見れば士郎の足型に深くへこんだ跡だけしか残っていないかった。

近づいて来る士郎は多量の返り血を浴びている。それは相手が一人ではなかったことを伝えるには十分だったが、いつ車を離れたのかという疑問と、この十秒足らずで敵を殺した畏怖の念が残る。

「少し待つてもらえるか？」

サイドミラーの辺りまで来た士郎は腰を屈めてレームに頼んで、後方の闇へ目を向ける。

「そっちはどうでした？」

「こっちは死徒が二人とグール八体でした」

闇の中から現れたのは先に出たはずのシエルだった。話からしてシエルもすでに敵と戦闘した後らしいが、その修道服には士郎と違って一滴も返り血を浴びていない。

「そうですか……。こっちは町で会った奴も合わせて死徒が二人、グールが六体でした」

「死徒が四体にグールが十四体。．．．．異常ですね」

士郎と話し合いながら一步一步歩いて来るシエルとココの目が合う。

「．．．．．！？」

「．．．．こ、こんばんわ」

ココたちを見つけたシエルはその場で固まった。まるでゼンマイがいきなり回るのを止めた。だが、その硬直も三秒程で終わり、士郎の耳を引っ張って茂みの中に入って行く。

「い、痛い．．。痛いですよシエルさん」

その士郎の様は先程までのクール振りとは違っていやに子どもっぽく、しかもココたちに助けを求めているようだった。

「何で連れて来ているんですか！？」

「いや、だって．．．．」

二人はひそひそ声で話してるつもりなのかも知れないが、二人の会話は全部丸聞こえである。士郎が弱々しく答えている姿はかなり面白く、二人の関係はまるで完璧主義な姉とヘツポコな弟のように感じた後にココは語る。

「ここは敵地ですよ！！わかってるんですか！？」

「それはわかっていいえ、士郎君はわかっていません。そもそも

ですね……………」

……………」

もうかれこれ三十分は説教が続いている。シエルは自分でここは敵地だと言っていたのに、その敵地で三十分味方を正座させて説教し精神疲労させている。

その間レームは煙草を吸い、バルメは士郎がココに渡した短剣を見て、ココは士郎とシエルの二人を観察していた。

「ねえ、シエルさん」

思い切ってココが口を聞く。シエルは体は向けず顔だけをココに向けて「何ですか？」とだけ答える。その不機嫌そうな答えに一寸怯みはするものの、ココは続けた。

「シエルさんとエミヤは付き合ってるの？」

「なッ!？」

それは意図してかどうかはわからないが、意地の悪い質問だった。それを聞いたシエルは白かった肌がボツと赤く染まり、顔をおさえて慌てふためいた。

「い、いえ……。そんな……………ただ私は……………、士郎君を……………」

笑ってしまうくらいあからさまな態度だが、上手く答えれていないシエルに代わり士郎が答える。

「それは違うぞ、ココ・ヘクマティアル。私達はただの協力関係なだけだ。私なんかがシエルさんと釣り合うわけないだろ」

——また、ゼンマイが止まった。だが、先ほどとは違って何かに悩んでいるようだ。

ようするに士郎の発言に悲しむべきか、喜ぶべきか……ど
ういう風に捉えるべきかを。

「……………嫌ですよ、士郎君！」

——照れた。再び顔を赤く染めたシエルは照れを隠すために士郎を殴った。……………強化した腕で。

「……………ガッ!!」

殴られた士郎は五メートル位吹っ飛び、最後には後ろにあった木に
めり込み、気を失った。

「士郎君の方こそたくましいし、頼りになるし、料理も上手いです
し……………って士郎君!?!どうしたんですか!?!」

人差し指をつんつんと合わせて自分の世界に入りきっていたシエル
がようやく現実に戻って士郎を介抱する。それを一から十まで見て
いたココは小さく笑っていた。

ブローグ 4 (後書き)

全然関係ないけど、今日まどか マギカの脚本が虚淵玄だって知った。

プロローグ5（前書き）

ちょうど一ヶ月ぶりの投稿。まだまだプロローグは続くぜ

プロローグ5

士郎が気を立ち直し、辺りを警戒するために一度この場を離れた。

「さてと――」

コホンと仕切り直しと言わんばかりに咳を一つつき、シエルはレームたちと向き合う。

「ここから先は歩きで行くので、車から降りてください」

もし罾や奇襲なんかされたら対処が難しい車内で迎撃は圧倒的に不利なので、前後左右上下を常に見渡せる徒歩の方がやりやすいし、守りやすいというのがシエルの結論である。

？「おいおい、歩きたってこんな暗闇の中をか？懐中電灯もないんだぞ？」

徒歩自体は納得できるが、今レームたちに懐中電灯という装備はない。周りを見渡せば、郊外の森の中ではいくら月が出ていと言っても限度がある。それも霧が出て、街灯もなく、そもそも車で何の事故も起きずに来ただけで奇跡と言える。それほどまでに辺りは暗闇で満ちている。

「そちらの方が好都合。光なんか照らしていると先に敵に見つかって先手を打たれます。そうすればこちらが不利になる」

確かにシエルの考えは正しい。戦場では先に相手を見つけた方が戦況を優位に進めることが出来る。戦争が起きる度に情報収集のため

の機器や技術が発達しているのもこの為だ。

「しかし、この辺りに敵はいなさそうです。それなら道の安全を確かめつつすすむべきでは？」

だが、レームやバルメもそれなりに戦場を駆け抜けた戦士。敵の気配察知能力も並の兵士以上に長けている。

故に今現在周りには敵はいない。そう断定できるのは己の勘だけではなく、地図を見た限りこの辺りには基地どころか民家一つないのだから。過剰な警戒は集中力を切らし、身を滅ぼす要因となることを二人はよく知っている。

「.....はあ」

だが、それは人という能力の限界値があまりに低い生物を相手に想定してるが故の考え方である。シエルに言わせてみればその考えは酷く甘い。

——例えば猫。嗅覚は犬には劣るもののそれでも人の数万倍以上。聴覚に至っては三十メートルもの距離を歩くネズミの足音をキヤッチし、正確な位置を捉えることが出来る。

死徒がみな人間をはるかに超えた感覚器官を持っているとは言わないが、それでも並の人間より優れているのも確か。現に強化した眼で四キロ先まで見えるという望遠鏡いらずの男もいるし、超遠距離魔術もある。だからこそ、時、場所に関わらず警戒を敷いとかないべならぬのだ。

「いいですか？死徒は人間とは違います。むしろ、化物に近い」

「それは……………」

二人は初めて見た死徒を思い出す。真つ二つに両断されたというのに血のように紅い瞳は揺るがなかった。殺すには心臓か脳を潰さなければならぬ。それ以外ではよっぽどのことがない限り死なない。それが死徒というものなのだ。

「それにおそらくですが貴方方二人には自分の身は自分で守ってもらうことになります。だから、お二人には早く暗闇に目を慣れてもらわないといけません。光がない状態でいきなり戦闘になったりでもしたら対処出来ないでしょう?」

「……………ああ、やつぱりそうなるのか?」

レームたちは自分たちも一応とは言え戦力に入っていることに予想出来ていたのかがつくりと頂垂れる。

——本来護衛とは一人に対して少なくとも三人は必要だ。だといつのに今いるメンバーを大別すれば二人が関係者で三人が一般人いくら教会の中でも鍛え抜かれたエリート中のエリートである代行者や、一人で戦場を渡り歩いた錬鉄の魔術師と言えど三人を守ることは出来ない。だからこそ、レームとバルメの二人に求められるのはただ一つ。自己防衛という一点のみ。

「……………まさか自分がゴーストバスターズの真似事をすることになるとは……………」

「こういう時はゴーストバスターズというよりはバイオハザードと

言うべきでしょう」

本来なら恐怖で縮み上がってもおかしくないというのに、二人の口振りには余裕がある。戦争と言う経験と実績が二人の平常心を保っているのだろう。問題は――

「――ココ・ヘクマティアル」

扉を開けた車内から足を出して座るココに話しかける。ココは三人が話してる間、心ここにあらずといった風で“エオロー”（戦乙女の聖なる加護）を見つめていた。

「・・・・・・・・え、・・・・な、何？シエルさん」

シエルの声に一拍置いて反応するココ。恐怖で固まっているのかとも思ったが、表情を見る限りそうではなく、何やら思案しているようだ。

「少しお話いいですか？」

トランクの上に座り尋ねると、ココはコクリと頷いた。

「貴方はH C L Iのフロマイト・ヘクマティアルの実子と聞きましたがそれは本当ですか？」

「・・・・・・・・はい、そうです」

「ではもう一つ。もしフロマイト氏がこういった事を知れば全力で原因の解明に試みますか？」

「？ 質問の意図がわからないんですけど．．．．．」

その問いにココだけでなく耳を傾けていたレームも首をかしげた。

「こういった事は世界にとって秘匿されなければならぬのです。私たちもできる限り隠蔽工作はしますが、科学による徹底解明などされたら秘匿は難しくなりますからね」

膝上にある“エオロー”（戦乙女の聖なる加護）がわずかに光る。

遠回しに、だけど理解が容易なその返事の真意はこうだ。シエルは死徒のような存在を公にしたくない。つまりは警告だ。いくらシエルたちが裏で隠蔽工作を徹しても穴が出来る可能性は十分あり、現在の科学を総じればその穴を突くことは容易い。ならば選択肢は二つ。一つは表で誰かが情報を断絶する事。二つ目はココたちがこの事を黙秘する。

「．．．．．わかりました。私たちが出来る限りならば情報操作にも協力します」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると助かります」

そう笑顔で感謝する。だが、その裏では聡い子だなと改めて感心した。シエルの言葉の真意に気づくのは予測済み。そして、選択肢を二つ与えたように見せかけたその実、最初からココに選択肢などなかった。

そもそも、口にすらだしてない約束をココたちが守る保証などない。故に、ココたちが黙秘するという事は死を以って為される事。信用のない約束を信じるよりは、覆しきれない死を事故死に見せた

方がよっぽど楽なのだから。

シエルは三人からは見えないうに準備した黒鍵をしまい込み、地面に下りた。

「．．．．．それでも貴方たちが生き残る可能性はゼロに近いですけどね」

サラリと爆弾発言を言つてのけるシエル。それにはココもさすがに驚き、今までの会話はなんだったのか。と、ツツコミを入れそうになった。

「何故か理由を聞いてもいいか？」

それを聞いたバルメが不機嫌になって口を出そうとしたところをレームが抑えて口を開く。

レームはバルメの気持ちも理解は出来る。二人はそれこそ何百何千という戦場を渡り歩いたつもりだ。故に、ここまで生きてきた自信とそれを支えるプライドがある。だが、今回は別だ。

相手は人ではなく文字通り化け物。だからこそ、なんとなくではあるが、レームは理由というやつに見当がついている。今から行く場所には人ではない化け物の巣窟。今までの常識が通用しない未知の世界。

そんな中で生き残る可能性があるとすれば間違いなくエミヤシロウとシエルの二人の存在が鍵となるだろう。

だがやはり今現在では圧倒的に情報が不足しているために答えにた

どり着くのは不可能。よって、レームはシエルの答えを待つ。

「みなさんは死徒とグールの違いを聞きましたか？」

「えっと・・・、確か死徒が人間から血を吸って生きる吸血鬼みたいなもので、グールはその血を吸われて尚、生き続ける亡者・・・だっけ？」

三人を代表してココが車の中で士郎から簡潔に教わったことを思い出しながら話す。

「・・・・・・・・まあ、その程度の認識で構いません」

釈然としない評価にココではなく何故かバルメがムツとする。

「グールは死徒によって支配され、使役されていると言ってもいい。だけど、死徒の世界に縦社会はあっても横社会はほとんどありえません」

隔靴搔痒な物言いに三人は頭の上でハテナを作って首をかしげる。

「——つまり、死徒同士でつるむことがないのであれば、この先にいるのは上級の死徒またはそれに類する魔術師ということだ」

不意に聞こえた声。その発生源が三人の上空だったため上を見上げると何時の間にか士郎が木の枝に立っていた。ココたちがその姿を確認した後すぐに枝から地面にへと飛び下りた。シエルとココたちの間にバランスを崩す事なく着地した士郎はシエルに事後報告をする。

「まだ死徒が三体いましたが、そのうちの一体を逃がしました」

「そうですか……………。これで七体目が……………」

士郎の報告を聞いて、シエルはうーんと腕を組んで唸り始めた。その行動にココは一瞥を投げるだけであえて突っ込まず、自分の疑問を士郎にぶつけた。

「魔術師ってなに？」

士郎の言葉に一度だけ出てきたキーワード。それをココは聞き逃さなかった。士郎は一瞬軽はずみに喋ったことを後悔したがここまで関われば仕方ないだろうと開き直る。

「……………そうだな。説明は道中にしよう。私もさっさとこんな事は終わらせたいのでね」

そうして五人は漸く歩き始めた。向かう先は明かりの見えない暗き闇の中へ――

ブローグ5（後書き）

ブローグが終われば銃器の勉強しなさいといけない。正直、銃器に関しては無知ですから．．．．．きつと投稿も遅くなると思う。まだ、ブローグ終わらないからいいけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786p/>

正義の味方と武器商人

2011年5月28日10時11分発行